

ジェンドリンの初期体験過程理論 に関する文献研究(上)

－ 心理療法研究におけるディルタイ哲学からの影響 －

田中 秀男*

はじめに

本稿はアメリカの心理療法家ユージン・ジェンドリンの理論的・哲学的な業績を紹介し、解説するものである。

心理療法研究の歴史の中で、ジェンドリンが果たした功績は次のことにある。心理療法が成功したときにクライアントの内側で起こっていることに注目し、まだ言葉にならない体験から表現が「いかに」生じてくるかを、細かな点まで明らかにしたことである。

明らかにしたことをもとに、彼は画期的な心理療法理論を生み出した。それが、今日「体験過程理論」と呼ばれているものである。

だが、体験過程理論は日本において十分に理解されているとはいえない。理由は、ジェンドリンの論述が難解なところにある。また、難解だと受け取られてきたのは、彼がどのような知的背景のもとにこの理論を生み出したのかが、ほとんど紹介されてこなかったことにある。

そこで本稿は、初期ジェンドリンの哲学的背景を紹介し、解説することにする。彼は心理療法の世界に入る前、哲学を専攻し、とくにドイツの哲学者ディルタイの思想を研究していた。ディルタイは、「体験」と「表現」との関係について考察した哲学者である。ディルタイ哲学が、ジェンドリ

*たなか・ひでお / 明治大学図書館委託職員

ンの心理療法研究にどのような影響を与えたかを、本稿では具体的に検討したい。これにより、彼の心理療法研究がより大きな視野の中で捉えられ、広く受け入れられる一助となれば幸いである。

本稿の見通しを述べる。第1部は、学者ジェンドリンの業績には様々な側面があり、各側面の認知のされ方にばらつきがあることを確認する。第2部は、あまり認知されてこなかった初期ジェンドリンの哲学的・理論的業績を紹介した文献研究である。第3部は、体験過程理論に関する文献リストである。なお、今回の号(上)では、第2部の途中までを述べる。

1 学者ジェンドリンの時代区分と業績

学者ジェンドリンの業績には、研究者の間で比較的言及されることが多かった側面と少なかった側面がある。とくに初期の哲学的・理論的側面はあまり言及されてこなかった。今まで各側面で言及のされ具合にばらつきがあったのには、一次資料の手に入りやすさの違いが関係している。だが、近年は資料収集の環境が変わってきた。初期ジェンドリンの業績を着想順に追う環境は整ってきたといえる。

1.1 学者ジェンドリンの様々な側面

学者ジェンドリンには、大きく分けると3つの側面がある。第一に、元々哲学者であり、今でも哲学者である。第二に、心理療法の理論「体験過程理論」の創始者である。第三に、心理技法「フォーカシング」の開発者である。

これら三つの側面のうち、世界的にみて、いちばん認知されているのは、「フォーカシング」の創始者としての第三の側面であろう。現状は日本でも同じである。池見(1999)はこう述べている。

ジェンドリン博士が切り開こうとしている「フォーカシング」という心理療法と自己理解の方法は、アメリカでも、ヨーロッパでも、日本でも知られるようになりました。「フォーカシング」と題した著作は10カ国語に訳されているそうです。しかしそうやって世の中に広がっていくフォーカシングは、ジェンドリン博士の仕事の一部に過ぎません。一番具体的で、マ

ニュアラル的な側面が世の中に広まっていく一方で、ジェンドリンの哲学的・理論的な業績はその影に埋もれていく印象を筆者はもっています。(p.243)

本稿ではこの、どちらかといえば影に埋もれていきがちな側面の方に注目したい。つまり、哲学的・理論的な業績のことである。

1.2 活躍時代の区分

具体的な考察を始める前に、まず、学者ジェンドリンの経歴を簡単な年表にして、彼の活動の大きな節目を確認する(ジェンドリン, 1993)。

- 1950 シカゴ大学哲学部に修士論文を提出する。
- 1952 シカゴ大学カウンセリングセンターで、カール・ロジャーズのもと、心理療法の仕事を始める。
- 1958 シカゴ大学哲学部に博士論文を提出する。
ロジャーズを追ってウィスコンシン大学へ移り、精神医学研究所のResearch Directorとなって実践と研究に打ち込む。
- 1963 ウィスコンシン大学からシカゴ大学に戻り、心理療法家として、哲学者として活躍する。

上記の経歴をもとに、筆者は以下のように彼の活躍を時代区分したい。

- 1950-58 第一次シカゴ時代
- 1958-63 ウィスコンシン時代
- 1963- 第二次シカゴ時代

活動場所によって時代を区分することは、ジェンドリンの場合、有益である。2つのシカゴ時代のあいだに、ウィスコンシン時代が含まれているが、この時代は、統合失調症(精神分裂病)患者を治療の対象としていたという点で、前後の時代と研究の性格が大きく異なるからである。

1.3 日本での認知のされ方

ジェンドリンの理論的業績に関して言えば、従来、日本において全く注目されてこなかったわけではない。とくに、ウィスコンシン時代の理論的業績は早くから日本で紹介されてきた。

日本において、彼のウィスコンシン時代の業績をいち早く紹介したのは、故村瀬孝雄氏である。村瀬氏は、ジェンドリンの論文のみからなる翻訳論文集『体験過程と心理療法』（ジェンドリン, 1966）を編集・翻訳のうえ、世に出した。現在に至るまで、日本の研究者がジェンドリンの理論的業績を引き合いに出すのは、主にこの論文集からである。

『体験過程と心理療法』の中で、理論的な著作として最も重要なのは、論文「人格変化の一理論」（Gendlin, 1964）である。この論文は、ジェンドリンがウィスコンシン時代末期に書き上げた著作である。引き合いに出されることが多いため、日本では、体験過程理論といえばこの著作で展開された理論のことだという見方が定着している。

だが体験過程理論は、ジェンドリンがウィスコンシン時代になって突然編み出したものではない。「人格変化の一理論」だけをとっていても事情は同じである。この論文の論述の中には、ウィスコンシンでの統合失調症治療の成果が反映されている部分が多いが、同時に、第一次シカゴ時代に既に完成させていた思考法、用語法も多々見られるのである。たとえば、「人格変化の一理論」という一つの論文の中には、地層のようなものがあり、より古い地層に属するものは、より以前の時代の業績として扱わなければならないことになるといえよう。

1.4 第一次シカゴ時代への注目

本稿第2部では、ウィスコンシン以前の時代の業績ということで、第一次シカゴ時代のジェンドリンの業績を追うことにする。この時代の業績は、ジェンドリン研究の盲点になってきたと思われるからである。

第一次シカゴ時代は、ジェンドリンがまだ公刊雑誌に寄稿していない時期である。このため、研究者の間でこの時代の業績が考察の対象とされることは少なかった。

だが、最近になって、この時代のジェンドリンの業績へのアプローチが可能となった。ジェンドリンの著作目録¹が充実してきたこと、また、インターネットの普及などによって資料の検索と収集が比較的容易になったことなどがその理由である。第一次シカゴ時代のジェンドリンの業績を調べる環境はようやく整ってきたといえる。

1.5 第一次シカゴ時代のジェンドリンと表現媒体

第一次シカゴ時代のジェンドリンは、公刊雑誌に寄稿していなかったとはいえ、何も業績を発表していなかったわけではない。調べたところ、当時の彼には少なくとも「学位論文」「学会発表」「大学学内の冊子」という、3種類の表現媒体があったことがわかった。

学位論文は、上記年表のとおり、修士・博士ともに第一次シカゴ時代の産物である。また、学会発表は、アメリカ心理学会大会にて、1956年からウィスコンシンに移るまで毎年行っていた (Gendlin et al, 1956; Gendlin et al, 1957b; Gendlin 1958c)。大学学内の冊子とは、シカゴ大学カウンセリングセンターが発行していたディスカッションペーパーのことである。

1.6 『カウンセリングセンター・ディスカッションペーパー』とは

第一次シカゴ時代のジェンドリンの著作には、未出版稿と公刊論文の中間に位置する著作がある。シカゴ大学の『カウンセリングセンター・ディスカッションペーパー』に寄稿した論文がそうである。寄稿されたこの冊子は、公刊雑誌ではない。

ディスカッションペーパーは、公刊する前のアイデアやリサーチ結果を印刷して大学学内やごく身近な人々に配り、フィードバックを求めるための冊子だった。なお、この冊子は、初代編集者をカール・ロジャーズが

¹“Primary bibliography of Eugene T. Gendlin” のこと。ベルギーの心理療法家 F. Depestele 氏によって編集され、現在米国フォーカシング研究所のサイトに掲載されている。
<http://www.focusing.org/bibliography.html>

とめ、1955年から1963年まで発行されていた²。

このような事情から、決して多くの人の目にとまる資料ではなかったが、第一次シカゴ時代のジェンドリンにとって、ディスカッションペーパーは貴重な表現媒体だったといえる。

1.7 第一次シカゴ時代の業績年表

第2部に移る前に、第一次シカゴ時代の業績を年表で確認しておきたい。本稿では、1950年のジェンドリンの修士論文から、1958年の博士論文あたりまでを第一次シカゴ時代の業績とする。二つの学位論文提出のあいだには、8年の開きがある。各業績は以下のとおりである。

- 1950 論文「ウィルヘルム・ディルタイと精神科学における人間的な意味の把握の問題について」
表現媒体：学位論文（哲学修士、12月） 詳細：本稿第2部
- 1955 論文「体験過程の特質とその変化」（共著）
表現媒体：ディスカッションペーパー 詳細：本稿第2部
- 1956 学会発表「セラピーにおける過程と結果のカウンセラーによる評定」（共同発表）
表現媒体：アメリカ心理学会大会（8月） 詳細：本稿第2部
- 1957 論文「関係の過程概念」
表現媒体：ディスカッションペーパー 詳細：本稿第2部
- 論文「説き語り体験過程入門」
表現媒体：ディスカッションペーパー（Gendlin, 1957b）
- 学会発表「時間制限療法の期間中と期間前後における、クライエントの時間と制限に対する内的態度」（共同発表）
表現媒体：アメリカ心理学会大会（9月）。大会発表要旨は Gendlin et al (1957b)。その後、論文掲載は Gendlin et al (1961)。

²ディスカッションペーパーに関する記述は、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校ロジャーズ・スペシャルコレクションのサイトを参照させていただいた。
<http://www.oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/tf2f59n977/C01/525256002>

- 1958 論文「象徴作用における体験過程の機能」
表現媒体：学位論文(哲学博士、6月) 詳細：本稿第2部
- 論文「体験過程の機能その2：二つの問題：セラピーにおける解釈と現在の強調」
表現媒体：ディスカッションペーパー (Gendlin, 1958b)
- 学会発表「体験過程：治療による変化の過程における一変数」
表現媒体：アメリカ心理学会大会(8月)。大会発表要旨は Gendlin (1958c)。その後、論文初掲載は Gendlin (1958d)、論文再録は Gendlin (1961)。

以上が第一次シカゴ時代の業績である。続く第2部では、業績の中身を具体的に追うことにする。ただし、紙面の都合上、上記の業績全てを扱うことはできない。よって、とくに、彼が修士論文でテーマにしたデイルタイ哲学が、のちの研究にどのような影響を与えたかにしぼって論じることにする。

2 体験過程理論の成立とデイルタイからの影響

第一次シカゴ時代のジェンドリンの業績を、着想順に追い、解説する。この時代、当初ジェンドリンは哲学を専攻していて、のちに心理療法の世界にも入っていった。そこで、大学院生時代にどんな哲学を専攻していたか、どのような問題意識をもって哲学の世界から心理療法の世界へ飛び込んだか、大学院生時代に培った哲学の思考法がのちの心理療法研究における変数の取り方や理論の組み立て方にどのような影響を与えたか、といったことを中心に当時のジェンドリンの業績を追いたい。

2.1 修士論文：ウィルヘルム・デイルタイと精神科学における人間的な意味の把握の問題について(1950年)

2.1.1 概要と先行研究

概要 修士論文(Gendlin, 1950)は、ドイツの哲学者デイルタイの思想を研究したものである。のちの体験過程理論の萌芽にあたるものとして、

筆者が注目するのは、「第3章 体験することと考えること」と「第6章 理解」である。第3章では、デールタイの鍵概念“Erleben (体験)”の英訳語として“experiencing”が提唱されている。また、第6章では、デールタイの「体験の表現」に関する論述が取り上げられている。

先行研究 修士論文の執筆当時を回想して、のちのジェンドリンはこう語っている。

ヨアヒム・ヴァッハがデールタイに導いてくれた。当時デールタイは翻訳されていなかった。だが、私はドイツ語を知っていた。12歳になるまでウィーンに住んでいたからである。(Gendlin, 1989, p.405)

デールタイの没後40年ほど経った当時でも、英語圏ではデールタイの哲学がそれほど普及していなかった。そのため、修士論文巻末の参考文献欄において、デールタイ哲学に関する英文の先行研究が挙げられているのはHodges (1944)のみである。Hodges (1944)は、英語圏のデールタイ研究書としては、最も早い時期に属するものである。なお、Hodges (1944)が刊行されて2年後、ジェンドリンの師ヴァッハ³が同書に対し、好意的な書評(Wach, 1946)を寄せている。

2.1.2 デールタイとは

ジェンドリンは最近、「おそらく、今日の私の哲学へ最も根本的な影響を与えたのはウィルヘルム・デールタイの哲学であろう」と述べている(Gendlin, 1997, p.41)。ジェンドリンの修士論文について論じる前に、そもそもデールタイとはどんな哲学者なのか、確認しておきたい。

デールタイ概説 まず、哲学者ウィルヘルム・デールタイ(Wilhelm Dilthey, 1833-1911)について、基本的なことを挙げておこう。

- 19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ドイツで活躍した哲学者である。哲学史においては、「解釈学」や「生の哲学」といった学派の中に入れられることが多い。

³ヴァッハについては、田中(2001)を参考にしていきたい。

- のちの人文・社会科学に相当する学問のことをデールタイは「精神科学 (Geisteswissenschaften)」と呼んでいた。デールタイの主張は「精神科学は、自然科学の方法とは違った方法で探求すべきだ」というものであった。(なお、「精神科学」は、英語では 'human sciences' あるいは 'science of man' と意識されている。)
- ドイツ哲学の用語として、「経験 (Erfahrung)」とは別に、「体験 (Erleben, Erlebnis)」という用語を定着させた。
- 最晩年は、精神科学を「体験 → 表現 → 理解」という枠組みの中で考察することを提唱した。

これらの中では特に、「体験」という概念と「体験 → 表現 → 理解」という枠組みに注目したい。そして、こうした概念や枠組みがジェンドリンにどんな影響を与えたかを検討する。

ドイツ語の「体験」概念の成立とデールタイの貢献 ドイツ語において、「体験」という概念が持つ意味、ならびに、「体験」概念の成立におけるデールタイの役割を確認しよう。デールタイの「体験 (Erleben)」概念こそ、のちのジェンドリンの「体験過程 (experiencing)」概念の元となった概念だからである。

現代ドイツ語の名詞には、英語の名詞 experience に当たるものが複数ある。大きく分けると、以下の二種類になる。一種類目の“Erfahrung”は、通常日本語で「経験」と訳されているものである。二種類目の“Erleben”あるいは“Erlebnis”は、通常日本語で「体験」と訳されているものである。

ドイツ語の「体験 (Erleben, Erlebnis)」は、「経験 (Erfahrung)」と比べた場合、より「直接的」だというのが哲学研究者の間で共通した見解である。ガダマー (1986) は、体験とは、「ただ他人から聞いたことや、うわさから出たもの、推論や、憶測や、想像しただけのものとは正反対のもの」だという (p.87)。マックリール (1993) は、体験を外的経験と対置してこう言う。「体験という現象は、確実性をもって与えられるが、外的経験の対象は、少なくとも部分的には推論の所産である」「実際デールタイは、しばしば、体験と内的経験を、あたかもそれらが同じ物を指しているかのよう扱っている」 (p.175)。

英語では、この2種類の用語にそのまま対応する言葉がない。あえて区別する場合には、「Erfahrung (経験)」の方を単に experience と訳し、「Erleben,

Erlebnis (体験)」の方をまとめて lived experience と訳すのが定訳となっている (マックリール, 1993, p175)。「Erleben (体験)」は「Leben (生)」に接頭語を付けてできた言葉なので、生 (life) の意味合いを生かして英訳されたのであろう。実際、デイルタイの哲学においては、「生」概念と「体験」概念はかかわりが深く、ときには、両概念が置き換え可能な用語として使われていることもある。

ガダマー (1986) は「実際のところこの 体験 という語に概念としての機能を最初に与えたのはデイルタイにほかならなかった」と言っている (p.88)。そこで、デイルタイ本人が「体験」という言葉を使っている例を見てみよう。

心的対象についての知識は、すべて体験に基づいている。体験は、いつでもそれ自体で確実なものである。(Dilthey, 1927, pp.25-6)

熱病患者が、この音は後ろにある物のせいだなど思っているとする。この場合、音によって体験が形づくられるのだといえる。体験は、音が鳴り響いているという点でも、音が物と結び付けられているという点でも、すべての点において実在的である。ベッドの後ろに物が置いてあるというのが思い違いだったとしても、意識における事実が実在すること自体は何ら変わるところがないのだ。(Dilthey, 1927, p.26)

何かについての悲しみは、内的な態度として体験されるともいえるし、私にとってそこにある、ともいえる。何かに対する欲望についても、同じことがいえる。こうしたことを心理学的にどう説明するにしても、体験は確実なので、さらに媒介手続きを取る必要など何もない。ゆえに、体験は、直接的で確実なものだと言うことができる。(Dilthey, 1927, p.26)

体験がそれ自体で確実なことを「私にとってそこにある (für mich da [sein])」と言い表わしているところに注目していただきたい。デイルタイの著作において繰り返し現れる言い回しである。これは、英語でいえば“(be) there for me”ということになる。ジェンドリンも、のちの著作で体験過程 (experiencing) の特徴を似たような言い回しで言い表している。

体験過程は、私たちにとって「そこに」ある (“there” for us) という意味で、具体的な塊である。体験過程は、そこにあるという点では、全く曖昧なものではない。ただし、それがいったい何なのか、よくわかっていないという点では漠然としているかもしれない。(Gendlin, 1962, p.11)

覚えておいていただきたい。体験過程はいつでもあなたにとってそこにある (there for you) ものなのである。(Gendlin, 1962, p.13)

また、体験は「直接的 (unmittelbar / immediate)」だとデイルタイが述べているところにも注目していただきたい。のちのジェンドリンの、実証研究における変数の取り方に、大いに影響してくる考え方である。

2.1.3 この論文の特徴

まず、デイルタイの著作のどんな部分にジェンドリンが注目していたかについて述べる。次に、デイルタイの考え方を、ジェンドリンがどのように受け取り、自分の理論の中に取り込んでいったかを検討する。

デイルタイの著作の中でジェンドリンが注目した部分 デイルタイの著作のうち、ジェンドリンの修士論文の中でとりわけ言及が多いのは、ドイツのデイルタイ全集第7巻 (Dilthey, 1927) である。第7巻とは、デイルタイ最晩年、70歳代 (1905-1911年) の講演記録や口述筆記や遺稿などが収めてあり、デイルタイの没後16年経ってようやく出版されたものである。

デイルタイの第7巻は、修士論文の「第6章:理解 (Verstehen)」(Gendlin, 1950, pp.33-43) においてとりわけ集中的に取り上げられている。この章においてジェンドリンは、第7巻の「体験・表現・理解」という節にある「他人の生の現われを理解する」という部分 (Dilthey, 1927, pp.205-20) の論述を丹念に追っている。この部分は、のちの体験過程理論の核心部分に関わってくると筆者は見る。よって、本稿でもこの部分を追ってみることにしたい。

他人の生 (Leben) や体験 (Erleben) を理解しようとするとき、私たちは、他人のおもてに現われた側面を介して理解するほかはない。この、おもてに現われた側面をデイルタイは「生の現われ」と呼ぶ。そして、デイルタイは「生の現われ」を、「①(狭義の)概念、判断、より大きな思考形態」「②行為」「③体験の表現」の3種類に分類している。さらに、生の現われの種類が違えば、理解の仕方も異なってくるのだとデイルタイはいう。

このうち、デイルタイが理解の問題を論ずる中で、最も重視したのは、③の「体験の表現」である。そして、「体験の表現」を重視する姿勢はジェンドリンにも引き継がれているといえる。そこで、「③体験の表現」の特徴を、「①(狭義の)概念や判断」の特徴と対比しながら、筆者なりにまと

めてみた (Dilthey, 1927, pp.204-5 参照)。

他人が表出した「(狭義の) 概念や判断」などを理解する場合、私たちは、その出どころの体験から切り離して意味を考えることができる。理解の対象は表出された思考の内容だけである。言っていることの意味は、いつ、誰が、どんな体験から表出したかということには関わりなく同じである。それに、「思考の脈絡のどこに現れるかには関わりなく同じ」なのである。そういう意味では、概念や判断は「論理的な規範にかなっている」といえよう。こうした判断の内容は、判断する人と、理解する人とで同じであり、「いわばものを輸送するように、言い表わす人から理解する人へとそのままのかたちで所有が移る」のだ。そのため、他のどんな生の現われよりも、理解は完全なのである。

とはいっても、「概念や判断」がもつ特徴は、良い面ばかりではない。誰が言ったかに関わりなく理解が完全であるということは、言った本人の「心的生の暗い背景や豊かさ」が、理解する側の人間には何も伝わってこない、ということでもあるのだ。

逆に「心的生の暗い背景や豊かさ」を伝えてくれるものこそ、「体験の表現」なのである。「体験の表現」は、「(狭義の) 概念や判断」とは全く異なる。表現の意味を理解するためには、現われ出た思考の内容だけでなく、さかのぼって精神的な脈絡を求めることが必要になる。

精神的なものへさかのぼる必要があるということは、理解が常に同じで完全とは限らないということである。「体験の表現」においては、「表現と精神的なものとの関係が、極めて控えめにしか理解の基礎となり得ない⁴」のである。

以上が、ディルタイが言ったことの要約である。元来ディルタイは、体験の表現を、主に偉大な芸術家の作品や偉大な作家の著作をモデルに考察している。だが、心理療法におけるクライアントの生の現われも、ディルタイのいう「体験の表現」の特徴をある程度そなえていると筆者は考える。東山 (1994) は、箱庭の中に置かれるミニチュア玩具のもつ意味についてこう述べている。

置いた場所が異なると、同じ蛙でも意味が変わる。置いた時間が異なると、同じ蛙でも意味が異なる。箱庭療法は継続して行われるので、同じ蛙でも次第にあるいはその時々で意味が異なる。置いた人が異なると当然意味が異なるだろう。A 君の蛙を A 君の蛙として、B 君の蛙を B 君の蛙として、感じるのが味わうことの第一段階である。(p.26)

ここで言う「感じる」や「味わう」は、蛙という生の現われを、「体験の表現」として理解することだといえるだろう。

⁴これは、表現とその意味するところが、必ずしも一対一で対応するわけではないことを言ったものであろう。

また、デイルタイが体験の表現を「解釈する」という場合、狭義には、文書に書き残されたものを技術的に理解することだと定義している (Dilthey, 1927, p.217)。しかし、のちのジェンドリンがテーマにする体験の表現のモデルは、心理療法の面接室での会話である。セラピストがクライアントの体験の表現を理解すること、あるいはこれに加えて、クライアントが自分の体験を自分で表現することを通して理解すること、などがジェンドリンの考察の対象なのである。そこで、デイルタイのいう体験の表現の特徴を、対話による心理療法の例に引き寄せて考察してみよう。

ジェンドリンの教え子の一人、アン・ワイザー・コーネルは、心理療法的な話の聞き方の心得を以下のように述べている。(ここでは、表現する人が「相手」にあたり、理解する人が「ガイド」にあたる。)

もし私たちが、例えば「固さ」とか「悲しさ」などの相手が使う表現をまったくその感じ「そのものである」かのように扱いはじめると、混乱が起こるのです。...感じそのものにはどんな表現でもとらえきれない、それ以上のものがあることがわかっています。ガイドは、感じそのものとその表現のあいだの区別をいつも意識しておく責任があります。(ワイザー・コーネル, 1996, p.60)

この文脈においては、デイルタイのいう「体験」にあたるのが「感じそのもの」であり、「表現」にあたるのが「固さ」や「悲しさ」である。もし仮に、ここでの生の表われを「(狭義の)概念」と見なすとしたら、理解の対象は「固さ」や「悲しさ」といった言葉の内容になるだろう。言葉の内容が、表出する人から理解する人へと、ものが移動するように移ると見なせば良いことになるだろう。

だが、実際には、心理療法における生の現われは、「体験の表現」の特徴を持つことが多い。表現を理解するためには、現われ出た内容だけでなく、表現が指し示す体験にまで「さかのぼって精神的な脈絡を求める」必要があるのだ。これが、「感じそのものとその表現のあいだの区別をいつも意識しておく」ということの意味だといえる。なお、この区別をデイルタイ本人の言葉で言うところのようになる。

理解は言葉と言葉の意味するところを離れる。つまり、たんに記号の意味を求めるのではなく、生の現われのさらに深い意味を求めてゆくのだ。(Dilthey, 1927, p.234)

ディルタイの考え方をジェンドリンはどのように受け取ったか ディルタイの考え方を、ジェンドリンがどう自分なりに受け取り、理論の中に取り込んで行ったかを検討する。ジェンドリンがディルタイ用語を訳すとき、その訳し方の点で興味深い意識が2箇所見受けられた。こうした意識は、ディルタイ哲学がのちの体験過程理論にどう取り込まれていったかを知るうえで示唆的である。

まず、意識の一つ目の箇所は、上で取り上げた狭義の「概念や判断」についてジェンドリンが解説したところである。ディルタイの原著では、生の現われの第1番目は、正確には「概念、判断、より大きな思考形態 (größere Denkgebilde)」とある (Dilthey, 1927, p.206)。この「より大きな思考形態」のところは、のちの英訳書では“larger thought-formations” とほぼ忠実に訳されている (Dilthey, 2003, p.226)。一方、同じ部分を、ジェンドリンはあえて“explicit formulations of thought” と意識している (Gendlin, 1950, p.34)。“explicit (明示的)” や “formulation (明確なことばによって言い表すこと)” は、博士論文 (Gendlin, 1958a) や「人格変化の一理論」 (Gendlin, 1964) において頻繁に登場する用語である。こうした言葉を使って訳すところが、いかにものちの体験過程理論を思わせる。

意識の二つ目の箇所は、ドイツ語の Erleben や Erlebnis を英訳している箇所である。

ジェンドリンが初めて両概念を区別したのは、修士論文の第3章「体験することと思考すること」の冒頭である。ジェンドリンの主張はこうである。ディルタイ哲学において、Erleben は「過程ないしは働き (the process or function)」をさすので experiencing と訳す。一方 Erlebnis は「単位となった体験 (a unit experience)」をさすのだというのである (Gendlin, 1950, p.13)。

この訳し分けの部分こそ、ジェンドリンが「experiencing (体験過程)」という用語を初めて使った箇所である。従来、ジェンドリンが用いるこの ing 形が何に由来するものなのかは永らく謎だった。が、上記のように、既にこの時点で experiencing と experience を明確に使い分けていたのである。つまり、この使い分けは、ロジャーズのもとで心理療法の仕事を始める前から行なっていたことを意味する。

確かに、ディルタイ研究者の間で、Erleben と Erlebnis の間に違いが見ら

れることを指摘する者もいた。たとえば、Bollnow (1936) は、ディルタイの遺稿を典拠に、両概念にわずかな違いが見られるときがあることを指摘している (p.85)。また、Erleben は体験の動的・作用的側面をあらわし、Erlebnis は体験の静的・内容的側面を表わすことがあるという指摘も全くなかったわけではない。だが、それにしても、使い分けられているときがわずかに見られるという程度である。

英語圏においてはどうか。筆者が調べた限り、両概念がジェンドリン以前に明確に訳し分けられていた形跡は見当たらなかった⁵。Hodges (1944) や Wach (1946) では、Erleben を experiencing と訳している形跡は見当たらない⁶。

Erleben と Erlebnis の使い分けは、ディルタイが明確に行なった区別というよりは、ディルタイの著作の中で、時に見られるわずかな違いにジェンドリンが注目し、のちの自分の理論の中でふくらませていったものだと筆者は考える。ディルタイは、両概念を区別なく使っている場合の方が多からである。よって、本稿では、ジェンドリンの著作と比較するためにディルタイの著作を引用する場合にも、Erleben だけでなく、Erlebnis を使っている箇所を区別なく引用し、どちらも一括して「体験」と訳すことにする。

2.1.4 のちの著作との関係

修士論文は、ロジャーズと仕事をはじめ前のジェンドリンの著作としては、現存する唯一の著作である。問題は、のちの著作と連続性があるかないかということであろう。表面的には決して見えやすいとはいえないが、筆者は連続性があると考ええる。

のちのジェンドリンの著作において、「ディルタイ」「解釈学」といった名前が出てくることは驚くほど少ない。「ディルタイ」に関していえば、博士論文では1回、「人格変化の一理論」では0回である。

⁵英訳書において、“Erleben = experiencing” “Erlebnis = lived experience” とする訳し分けが採用されるのは、実は Dilthey (2003) になってからのことである。

⁶Nacherleben(追体験) が re-experiencing と訳されることはあったが、あくまでこのように特殊な文脈の中だけの話である。

しかし、体験が直接的であることや、「体験の表現」の特徴についてデルタイが述べたことは、のちにジェンドリンが心理療法研究をする上で、変数の取り方、理論の組み立て方に大きく影響すると筆者は考える。

2.2 哲学から心理療法へ (1952 年以前)

ここでは、研究業績の紹介はひとまず脇に置き、ジェンドリンの経歴的な側面を紹介したい。ジェンドリンが哲学の世界から臨床の世界へ、いつ、どのように飛び込んだのかということである。

修士論文を書く前なのか、後なのかははっきりしないが、シカゴ大学カウンセリング・センターのスタッフになる前に、ジェンドリンはセンターをぶらりと訪れている。非指示的アプローチなるものがあるとうわさを聞きつけて訪れたのだという。

「概念を超えたところの経験とは何か」ということをもっと知りたかったのです。セラピーのなかではそれがいつも行われているのではないかと思いつきました。(ジェンドリンら, 2002, pp.197-8)

他にも、「我々は体験をどのように象徴化しているのか」などといった自分の哲学の課題をはっきりと持ちながらセンターを訪れたそうである。そして、センターを初めて訪れた時のことをのちにインタビューでこう回想している。

待合室に、センターのスタッフが書いたものが置いてあるのを見つけました。...クライアントのふりをして一冊借りて帰りました。読んでますます興味を持ちました。まさに人々は生き生きと体験を象徴化していたんです。(Gendlin et al, 1983, p.78)

その後、どのくらい後のことかはわからないが、ジェンドリンはロジャーズの面接を受け、即座に一年間の実習を許可された (Gendlin, 2002, p.xvi)。実習を終了したのち、翌年にはインターンとなっている。以上が哲学の世界から心理療法の世界への順序である。なお、ジェンドリン本人の証言によれば、ロジャーズと仕事を始めたのは 1952 年からとのことである (Gendlin, 2002, pp.xi)。

心理療法の仕事をしていくうち、ジェンドリンは「その場で起こっていることに哲学の考え方を適用できる」(Gendlin, 1983, p.78) と思うようになった。そして、心理療法の仕事を始めてから3年後の1955年、ジェンドリンは共著論文を発表する。

では、その共著論文を紹介・解説することにしよう。

2.3 論文：体験過程の特質とその変化(1955年)

2.3.1 概要と経緯

概要 「体験過程」という概念を、心理療法研究の鍵概念として初めて提唱した論文である。実証研究そのものではなく、実証研究への仮説を提案したものである。

経緯 まずジェンドリンは、同僚のフレッド・ズィムリングとともに、カール・ロジャーズが主催する「クレイジー・アイデア」というセミナーにおいて口頭発表をした。発表内容をジェンドリンらはカウンセリングセンター・ディスカッションペーパーに寄稿した(Gendlin et al, 1955)。なお、この論文は約40年後に公刊雑誌に再録された(Gendlin et al, 1994)。

2.3.2 この論文の特徴

まず、「体験過程」という用語を使う領域が、哲学から心理療法へと変わるに当たって、意味合いに変化が生じたかどうかを検討する。次に、この論文で心理療法の変数として提案される「体験過程の直接性」の意味合いが、ディルタイ哲学の影響を受けているかどうかを検討する。

心理療法用語としての「**experiencing** (体験過程)」「**experiencing** (体験過程)」という用語そのものは、修士論文で使われていたが、心理療法の世界で使われたのはこの論文が初めてである。この論文での「体験過程」は、たしかにディルタイの体験概念の持つ意味合いを保ってはいる。だが、心理療法の用語となるにあたり、当然意味合いがそれなりに変化しているところがある。

特徴的なのは、「体験過程」をとりわけ感情と結び付けて論じていることであろう。

「体験過程」という用語によって我々が意味したいのは、有機体の内側で進行していて、感じるができるものすべてのことである。(Gendlin et al, 1955, p.1)

ほかに、「感じる (feel)」や「感情 (feeling)」といった言葉が、この論文には頻繁に登場する。

たしかにデイルタイも体験の持つ感情的な側面を重視していた。哲学の世界における知性偏重の傾向に対して異を唱え、デイルタイは「体験」概念を提唱したのである。しかし、彼は「体験」という概念によって、知性・感情・意志の全体性を強調したのであって、感情だけを特化したわけではない。一方、ジェンドリンが注目したのは、「体験の表現」の中でも、心理療法におけるクライアントの体験の表現だった。そこで強調したのが体験の、とりわけ感情的な側面であったのだといえよう。

「直接性 (immediacy)」について 変数の一つとして、体験過程の「直接性 (immediacy)」が提唱されている。直接的でないときには、体験過程から離れていて、「観察者のような立場で感じている」(Gendlin et al, 1955, p.5) 状態なのだという。

クライアントが「観察者のような立場で感じている」発言を現代の心理療法の例から見てみよう。池見 (1995) は、内科の患者を面接していて困ったときの体験についてこう述べている。

この患者は発病前に自分が設立し、経営する会社が倒産した、という大変なストレス状況を生きていた。しかし、面接ではまったく感情表現がないのである。「どう感じているのですか」と聞いてみても、「資本主義社会だからあたりまえのことですよ、強いほうが生き残る、弱いものは倒れる」という、解説者風の発言しかない。いくら情緒的な面に触れようと思っても、解説者のような反応しか返ってこない。(pp.37-8)

この患者に、「解説者風の発言しかない」のは、体験過程を「観察者のような立場で感じている」だけだからであろう。

「解説者風の発言」は、デイルタイふうに言えば「体験の表現」の特徴をあまり持たない。自分の会社が倒産したのは資本主義社会だからあたり

ままだ、という患者の判断内容は、いわばものを輸送するように患者からそのままのかたちでセラピストに移る。よって、論理的にはたしかに非の打ちどころのないし、治療者に誤って理解されることはないだろう。だが、一方で「思考内容がその背後の暗い背景と豊かな心的生とに対してもつ関係」については、セラピストに何も伝わってこないのである。

2.3.3 のちの著作との関係

体験過程の「直接性」は、翌年の実証研究において、さっそく変数として用いられることになる。

そして、「直接性 (immediacy)」という用語はのちの「人格変化の一理論」でも使われている (Gendlin, 1964, p.127)。また、この用語に限らず、「人格変化の一理論」で使われている多くの用語が既にこの時点で多く使われている。「体験過程の様式 (manner)」「構造拘束的 (structure-bound)」「過程」「内容」「凍結した (frozen)」などといった用語である。

この論文の第3部は、「心理療法を受けた結果なぜ変化が起こったのか」を理論的に考察している。ジェンドリンが、「人格」ではなく「人格変化」について理論的に考察し始めたのは、なにもウイスコンシンへ行ってからではなかったのである。

また、まだ仮説の段階ではあるが、クライアントの発言の分析において、内容変数以外のものを変数に取りたいとすでにこの時点で言っている。挙げられている例は、「私は怒っている」や「私は愛されている」という発言に対する変数の取り方である (Gendlin et al, 1955, p.2)。従来の研究では、これらの発言は、感情が否定的か肯定的かということで異なるカテゴリーに振り分けられていた。それに対し、内容は異なっても、体験過程の強さ (intensity) や、よどみなさ (fluidity) や、直接性 (immediacy) など、新しい変数から見れば、同じと見なすこともあり得るのだとジェンドリンはいう。こうした新しい変数のことを、当時のジェンドリンは、体験過程の「特質 (qualities or dimensions)」とまとめて呼んでいた。「特質」という総称自体は、のちの著作では使われなくなる。しかし、「直接性」など個々の変数は、のちの著作でも「体験過程の様式 (manner)」や「過程変数」など

と名前を変えた総称の中で重視され続けることとなる。果たして直接性などの変数はどのような変遷と発展をたどるのか。まずは、ここで仮説として提唱された変数が、翌年の実証研究で証明されたことから見てみよう。

2.4 学会発表：セラピーにおける過程と結果のカウンセラーによる評定 (1956年)

2.4.1 概要・先行研究・経緯

概要 実証研究で、治療関係に関する評定尺度を中心にした6つの尺度を選び、セラピー（心理療法）の成功との相関関係を調べたものである。

先行研究 この研究には、先行研究が2つある。一つは、フィードラーの博士論文 (Fiedler, 1949)、もう一つは、シーマンの実証研究論文 (Seeman, 1954) である。

フィードラーが自身の実証研究から導き出した結論は、「治療の成功は、セラピストの学派の違いよりも、セラピストの熟練度と相関関係がある」というものだった。とりわけ熟練したセラピストがかもし出す治療関係が大事だと主張していた⁷。

シーマンの実証研究はどうだろうか。この研究は、カウンセラー（セラピスト）による評定尺度を9項目挙げ、セラピーの成功評定との相関関係を調べたものである。うち、唯一相関関係がなかったのが、第4項目「クライアントが治療関係自体を、とりわけセラピーの話題にしていたか」であった。この結果に対してシーマンはこう考察している。

第4項目の結果にはいささか驚いた。近頃クライアント中心療法では、治療関係こそが大事なだとされていたからである。セラピーにおいてクライアントがとりわけ治療関係自体を話題にしていれば、ぐっと大きな変化が起こってくれるだろうと私たちはひそかに当て込んでいた。だが、当ては外れたのである。そうは言っても、治療関係が重要でないことを意味するわけではないことは指摘しておくべきであろう。第4項目が扱っていたのは、治療関係をはっきり (explicit) と口に出していたかということだけだからである。(Seeman, 1954, p.104)

⁷フィードラーの博士論文そのものは公刊されていない。だが、実証研究の部分だけが要約されて公刊雑誌に掲載されている。それが、Fiedler (1950) である。

治療関係が重要であるということと、治療関係を話題にしたからといって治療が成功するわけではないということ、二つの言い分の間を果たして折り合いはつくのか。この問題を引き継いだのが、今回のジェンドリンらによる学会発表なのである。

経緯 1956年8月、ジェンドリンはアメリカ心理学会大会で初の発表を、同僚のR. ジェニーとともに起こした(Gendlin et al, 1956)。翌年には、発表をディスカッションペーパーで報告している(Gendlin et al, 1957a)。なお、学術雑誌に公刊されたのは、ジェンドリンがウィスコンシンに移った後のことである(Gendlin et al, 1960a)。

2.4.2 この研究の特徴

クライアントの発言を、いくつかの尺度でカウンセラー(セラピスト)が評定し、治療の成功/失敗との関わりを調べるという点では、シーマンの先行研究とスタイルは同じである。違いは尺度の取り方の幅が広がったことである。

尺度に使った項目を、治療の成功/失敗とのかかわりで分類すると、以下の2種類になる(Gendlin et al, 1960a, p.211 参照)。まず、成功/失敗と相関がなかった項目は、「治療関係をとりわけ話題にしたか」、「セラピストのことをとりわけ話題にしたか」、「過去の出来事をとりわけ話題にしたか / 現在の出来事をとりわけ話題にしたか」であった。一方、成功/失敗と相関があった項目は、「治療関係から新しく重要な体験が生じたか」、「カウンセラーとの治療関係を、自分の対人関係がうまくいかないことの一例として話したか」、「感情を直接的に『表現した』か / 感情について『報告した』か」であった。

最後の項目はとくに重要である。「表現」が尺度の高い場合に当たり、「報告」が尺度の低い場合に当たる。発言例を挙げよう。尺度の高い例は、「先生なんか、だいきらい」、「今、はっきり思い出してきました。昨日の夜、どんなに怖かったかってこと」、「は～あ、なんか沈んだ感じです」などである。尺度の低い例は、「私にはこの憎悪の感情があって、それはあなたに対するものです」、「昨晚、とても怖かったのです」、「私にはよく

落ち込むことがあります」などである。なお、尺度の低い発言には、今の気持ちを示すものが、言葉にも声の調子にも表れていないことが特徴なのだという。

最後の項目は、'55年論文で取り上げられた「体験過程の直接性」が、「表現の直接性」と名前を変えて項目に挙げられたものだといえる。また、'55年論文で述べられている「観察者のように感じている」にすぎない発言が、ここでいう尺度の低い例のあたるといえる。

なお、弘中(1995)は、「表現とは、クライアントがすでに意識的に準備していたものをただ(一種の報告として)表出することではなく、表現に随伴してクライアントにとっての新しい体験を引き出す」ことだ述べている(p.60)。同じことは、ジェンドリンのいう「表現」と「報告」の違いについても、言えるだろう。

2.4.3 のちの著作との関係

この研究で上がった成果は、のちのジェンドリンの著作において繰り返し取り上げられることになる。第一次シカゴ時代ののちの著作において取り上げられることは、以下の各解説で言及する。ここでは、ウィスコンシン時代以降にも引続き取り上げられたテーマに言及しておきたい。

「表現」と「報告」の対比について 「表現」と「報告」の対比は、のちの体験過程尺度(experiencing scale)の高低に受け継がれる。ジェンドリンの著作目録において、experiencing scaleという言葉が初めて現れるのは、ウィスコンシン時代の Gendlin et al(1960b)である。これに改良が加えられ、一応の完成を見たのは、第二次シカゴ時代の Klein et al(1969)であった。

なお、クライアントによる「報告」調の発言は、ウィスコンシン時代の論文「人格変化の一理論」のなかで、「説明的旋回」(Gendlin, 1964, p.125)と呼ばれるようになる。

治療の成功と相関がなかった変数と相関があった変数それぞれの共通点のちにジェンドリンは、今回の研究において治療の成功と相関がなかった変数をまとめて「内容変数」と呼び、「直接性」など、相関があった変数をまとめて「過程変数」と呼ぶようになる。ウィスコンシン時代の論文「心理療法研究のための過程変数」を見てみよう。

効果的な研究変数に必要と思われる第5の性質は、それら変数が内容変数ではなくて、過程変数であるということである。…最近になってわれわれは、言語行動をただ単に内容によって「何が」語られるかということと分析するのではなく、それと同時に個人が如何に自分自身を表明するかという点に関して分析しうることがわかりつつある。(ジェンドリン, 1966, p.7)

治療関係の重要性の意味 今回の研究によって、治療関係を話題にしたからといって治療が成功するわけではないことは改めて確認された。このことと、治療関係が重要であるという主張との間にジェンドリンは接点を見出し、説明している。彼はウィスコンシン時代の「人格変化の一理論」において、内容としての治療関係と、過程としての治療関係を区別してこう述べている。

心理療法における「自己探究」は、言っている内容の点でだけ、人との「関係」と区別できるのだ。進行する体験の過程としては、どちらもいっしょである。クライアントは「ここでだけ、私は私でいられます」と言うかもしれない。(この過程には、自分のことも人との関係のことも含まれている。)あるいは、ほとんど自分のことについてだけ話すかもしれない。だが、言っている内容が自分のことであろうと、人との関係のことであろうと、過程は同じなのである。(Gendlin, 1964, p.136)

(次号へ続く)

謝辞： 本学文学部心理社会学科の弘中正美教授には、原稿をチェックしていただき、貴重なコメントをいただいた。フォーカシング・プロジェクトの笹田晃子先生からも貴重なコメントをいただいた。本学図書館レファレンス係の方々には、一次資料の入手にあたって大変お世話になった。ここにお礼を申し上げたい。

最後に、私を体験過程理論に導いてくださった阿世賀浩一郎先生(明治学院大学)と末武康弘先生(法政大学)に感謝申し上げたい。

参考文献

- Bollnow OF (1936): *Dilthey: eine Einführung in seine Philosophie*. B.G. Teubner.
- Dilthey W (1927): *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. (Gesammelte Schriften. 7), B.G. Teubner.
- Dilthey W (2003): Makkreel RA, Rodi F (Eds) *The formation of the historical world in the human sciences*. Princeton University Press.
- Fiedler F (1949): *A comparative investigation of early therapeutic relationships created by experts and nonexperts of the psychoanalytic, non-directive, and Adlerian schools*. Doctoral dissertation. Department of Psychology, University of Chicago.
- Fiedler F (1950): A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic, nondirective and Adlerian therapy. *Journal of consulting psychology*, **14**, 436-445.
- ガダマー (1986): 饗田収ほか (訳) 真理と方法：哲学的解釈学の要綱 1 法政大学出版局
- Gendlin ET (1950): *Wilhelm Dilthey and the problem of comprehending human significance in the science of man*. MA Thesis, Department of Philosophy, University of Chicago.
- Gendlin ET (1957a): A process concept of relationship. *Counseling Center Discussion Papers*, **3**(2).
- Gendlin ET (1957b): A descriptive introduction to experiencing. *Counseling Center Discussion Papers*, **3**(25).
- Gendlin ET (1958a): *The function of experiencing in symbolization*. Doctoral dissertation. Department of Philosophy, University of Chicago.
- Gendlin ET (1958b): The function of experiencing II. Two issues: Interpretation in therapy; focus on the present. *Counseling Center Discussion Papers*, **4**(3).
- Gendlin ET (1958c): Experiencing: a variable in the process of therapeutic change. (abstracts) *The American psychologist*, **13**, 332.
- Gendlin ET (1958d): Experiencing: a variable in the process of therapeutic change. *Counseling Center Discussion Papers*, **5**(1).
- Gendlin ET (1961): Experiencing: a variable in the process of therapeutic change. *American Journal of Psychotherapy*, **15**(2), 233-245.
- Gendlin ET (1962): *Experiencing and the creation of meaning: a philosophical and psychological approach to the subjective*. Free Press of Glencoe.
- Gendlin ET (1963): Process variables for psychotherapy research. *Wisconsin Psychiatric Institute Discussion Paper*, **42**

- Gendlin ET (1964): A theory of personality change. Worchel P, Byrne D (Eds) *Personality change*. John Wiley and Sons, pp 100-148.
- Gendlin ET (1989): Phenomenology as non-logical steps. Kaelin EF, Schrag CO (Eds) *American phenomenology. Origins and developments*. Kluwer. pp 404-410.
- Gendlin ET (1997): How philosophy cannot appeal to experience, and how it can. Levin DM (Ed) *Language beyond postmodernism: saying and thinking in Gendlin's philosophy*. Northwestern University Press, pp 3-41.
- Gendlin ET (2002): Forward. Russell D (Ed) *Carl Rogers: the quiet revolutionary: an oral history*. Penmarin Books, pp xi-xxi.
- ジェンドリン (1966): 村瀬孝雄 (訳) 体験過程と心理療法 牧書店
- ジェンドリン (1993): 略歴 筒井健雄 (訳) 体験過程と意味の創造 ぶっく東京 p 5
- Gendlin ET, Zimring F (1955): The qualities or dimensions of experiencing and their change. *Counseling Center Discussion Papers*, **1**(3).
- Gendlin ET, Jenney RH (1956): Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. (abstracts) *The American psychologist*, **11**, 363.
- Gendlin ET, Jenney RH, Shlien JM (1957a): Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. *Counseling Center Discussion Papers*, **3**(15).
- Gendlin ET, Page M (1957b): Client attitudes toward time and limits before, after, and during a time limited therapy. (abstracts) *The American psychologist*. **12**, 436-7.
- Gendlin ET, Jenney RH, Shlien JM (1960a): Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. *Journal of Clinical Psychology*, **16**(2), 210-213.
- Gendlin ET, Tomlinson TM (1960b): *Experiencing scale manual*. Unpublished manuscript.
- Gendlin ET, Shlien J (1961): Immediacy in time attitudes before and after time-limited psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology*, **17**(1), 69-72.
- Gendlin ET, Lietaer G (1983): On client-centered and experiential psychotherapy: an interview with Eugene Gendlin. Minsel WR, Herff W (Eds) *Research on psychotherapeutic approaches*. Verlag Peter Lang, pp 77-104
- Gendlin ET, Zimring F (1994): The qualities or dimensions of experiencing and their change. *The Person-centered Journal*, **1**(25), 55-67.
- ジェンドリン・伊藤義美 (2002): ジェンドリン, E.T. 博士が物語る 伊藤義美 (編) フォーカシングの実践と研究 ナカニシヤ出版 pp 197-216
- 東山紘久 (1994): 箱庭療法の世界 誠信書房

- 弘中正美 (1995): 表現することと心理的治癒 千葉大学教育学部研究紀要 1 教育科学編, 43, 55-65
- Hodges HA (1944): *Wilhelm Dilthey: an introduction*. Routledge & K. Paul.
- 池見陽 (1995): 心のメッセージを聴く：実感が語る心理学 講談社
- 池見陽 (1999): あとがき ジェンドリン・池見陽 セラピープロセスの小さな一歩：フォーカシングから人間理解 金剛出版
- Klein MH, Mathieu PL, Gendlin ET, Kiesler DJ (1969): *The experiencing scale: a research and training manual*. Wisconsin Psychiatric Institute.
- マックリール (1993): 大野篤一郎ほか (訳) デイルタイ：精神科学の哲学者 法政大学出版局
- Seeman J (1954): Counselor judgments of therapeutic process and outcome. Rogers CR, Dymond R (Eds) *Psychotherapy and personality change: co-ordinated research studies in the client-centered approach*. University of Chicago Press, pp 99-108.
- 田中秀男 (2001): ロジャーズに出会う前のジェンドリン：フォーカシングの哲学的背景を探し求めて *The Focuser's Focus*, 4(1), 4-5.
- Wach J (1946): Critical review: *Wilhelm Dilthey: an introduction*. by H. A. Hodges. *The Journal of religion*, 26, 217-218.
- ワイザー・コーネル (1996): フォーカシングガイド・マニュアル 金剛出版